若者よ、
地方をめざせ!

第9回

ローカルを突きつめろ!

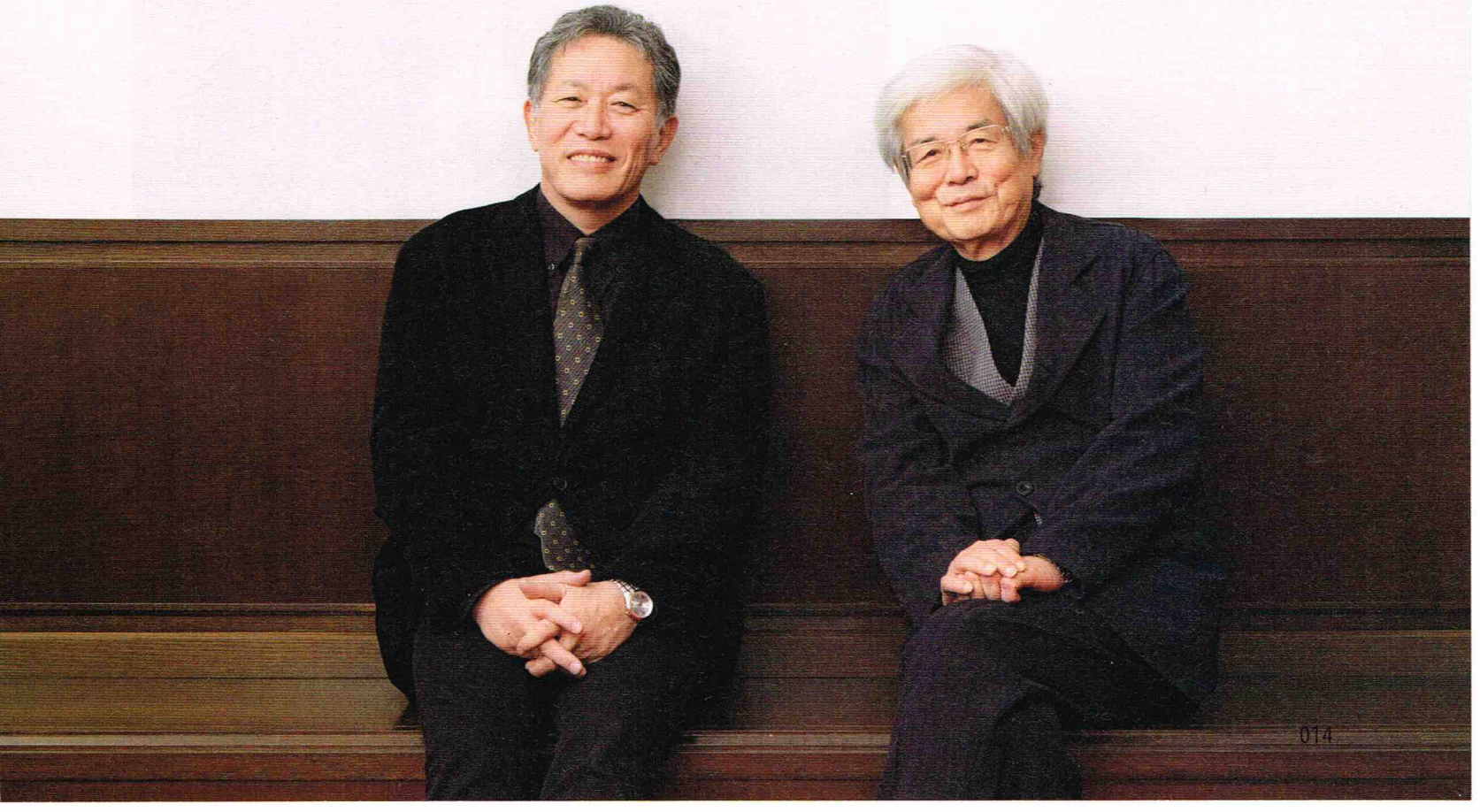
前編

当連載で8回にわたり「脱東京論」を展開してきた内田樹さん。
「僕はローカルな人間なんです」という養老孟司さん。
現代社会を独自の視点から考察しつづけてきたふたりが語る
「いまローカルに生きるということ」。
前編は、都市で暮らす人間と田舎で暮らす人間の違い。
ずっと都会で暮らしていると、人間、どうなってしまうのか?

構成:佐藤恵菜　写真:柳大輔

スペシャル対談

養老孟司 × 内田樹



東京で暮らしていると身体の使い方が下手になる

内田　僕の「脱東京」のアイデアは、養老先生が以前おっしゃっていた「参勤交代」論からいただいたんです。はじめてお会いしたときに「オーライ！ニッポン」という活動をされていて、その名刺をいただいたんです。現代人も江戸時代の武士のように田舎と都市を行き来しながら暮らせという提案でしたね。

養老　1年に一度でもいいから田舎に行って農業をやれという意味でね。そうでもしないと、都市の人が自然にふれ、土にふれる機会がなくなっちゃう。

内田　とにかく子どもを田舎へ送り込まねばならぬ、と。

養老　そう。ところが最近は田舎も都会になっちゃったからね。昔は日本一長寿だった沖縄も、車社会になって平均寿命が短くなった。日常の中で体を動かすことがどんどん減っている。そうすると身体の使い方が下手になっちゃうんです。

内田　明治・大正ぐらいまで、農村の女性は米俵を5俵、担いでいたそうです。1俵60キロだから300キロです。それだけ身体の使い方がうまかったということなんでしょうね。

養老　いまは世界中で体を動かさなくなっています。体操はヨーロッパが始めたんだけど、子どもに体操させるなんて完全に都会の病。田舎なら体操なんていらない。米俵担いでるし、薪割りとかね。僕も子どもの頃やりましたよ。腰が入らないとダメなの。

内田　薪割りは難しいですよね。前に甲野善紀先生に教わったんですけれど、なかなか力が通らない。餅つきもやってますけれど、田舎でやってた子はうまいけど、都会の子はできませんね。

養老　いわゆるへっぴり腰でね。ローカルを突きつめるには、まずそのへんから直さないと。僕がいちばん考えちゃうのは日常の中に、それをどう取り入れるか。学校の掃除も外注しちゃうでしょ、あれで体の使い方を覚えるのに。

内田　凱風館で掃除をしていると、箒を使えない人がいて驚きました。二十歳過ぎの大人なのに「これどうやって使うんですか」って。

養老　マッチを擦れない人もいますね。まぁ、いまはマッチ使わないけど。

内田　手がちゃんと使えないんです。前に小児科のお医者さんから聞いたんですけど、いまの子は手の平の感覚がとても鈍いんだそうです。

養老　たぶんほかの感覚も鈍い。見えない、聞こえない、触れない。人間の感覚って訓練するとスゴイことができるんです。町工場で金属の鋳型をつくっている職人さんは指先でミクロ単位の違いがわかるでしょ。生物ってそれを使う場面がないと、どんどん省略してしまうんです。

内田　米粒に千字書くとか、1センチ四方の紙に百人一首の歌をすべて書くといったマイクログラフィーという技術があります。あれは手を動かしているんではないそうです。頭の中で字をイメージしていると手が勝手に動く。そういう精密な身体能力が昔はあった。

「自分」を主張するのに「修行」をしなくなった現代人

養老　そうした技術を使わざるを得ない状況を、現代の暮らしにどうつくればいいのかなあ。

内田　針の穴に糸を通すとか、包丁でネギを切るといった作業は、放っておいても必ず正中線（体の中心線）上で行います。精度の高い運動はそれなりの全身の使い方を要求する。だから、日常的に裁縫や炊事や筆で字を書いたり、箸で小さなものをつまんだりということをしていれば、それだけでかなり感覚は磨かれるんですけどね。

養老　だから女性の方が寿命が長いんだ。

内田　「家事労働」っていいますけど、あれを「労働」って言うからいけないんです。

養老　「家事」で止めるべき。

内田　そう、汎用性の高い総合的な身体技術なんですから。お坊さんが小僧にまず寺の掃除をさせますが、あれは別にいじめているわけじゃない。

養老　いじめているわけでも寺をきれいにしているわけでもないですね。身体的な訓練をしている。

内田　修行なんです。

養老　ところが修行という言葉が死語に

都市は感覚を使わなくても
いいようにできている

なっていますね。僕、ホントに不思議に思うんだけど、これだけ「個人」とか「自分」とか言い出しているのに、なぜ修行が消えちゃったんですかね？　自分自身を作品と考えると修行がわかるんです。いまの人は自分を作品だと思ってないでしょ？　作品として自分を完成させる、そのために修行がある。比叡山の千日回峰行も1000日歩いたって何の役にも立たないけど、最終的に何ができるかといえば人ができる。そういう考え方がなくなっちゃいましたね。武道にはまだ残っていると思いますが。だから究めた人を「名人」と言うんですよね。人の名作だから名人。

内田　修行をしなくなったのは、何でも優劣をつけて強弱勝敗を競うようになったことと関係があると思います。ライバルに勝つというようなマインドでやっているとぜんぜん修行にはならないんです。

養老　競わなくていいのにね。下手でもいい絵ってあるじゃない。どう見ても下手だな、でもいいなっていう。

内田　たしかに競争的なマインドが訓練の動機づけになることもあります。でも目的が生きる力を高めることでなく、他人に勝つことになってしまうと、もう修行にならない。スポーツはやる場所と時間と評価方法が決まっている。オリンピック選手は自分の競技日にピークを持っていく。その日が終わったら死んでもいいみたいな訓練をする。でも、人間という「作品」は死ぬまで手を入れつづけて、死ぬときに「こんな作品ができました」ということがわかるのであって、人生の途中にピークなんかがあっちゃいけないんです。スポーツは長い時間をかけて精密な身体の使い方を身につけて、生きる力を育てるプログラムではないですね。

養老　文科省って結局、スポーツ局ですからね。本気で教育を考えていない証拠ですよ。

内田　小学校からずっと優劣を競わせていますからね。

ちょうどいい共同体の人口は5万人ぐらい？

養老　受験戦争とかね。あれは戦前からあったようですね。でも中国や韓国も同じです。台北も予備校だらけですよ。アジアの特性なんじゃないかな。人口が集中するでしょ、狭い所に。そうするとあっという間に競争社会になる。中国の科挙なんてものすごく大変だったでしょ。

内田　そういえば、ヨーロッパには科挙にあたるものがありませんね。

養老　フランスのバカロレアは科挙を手本にしたそうだけど、もともと貴族社会の階層内の競争だから人が少ない。その点、アジアはわりあい階層がないでしょ。

内田　アジアはもともと大衆社会だからですかね。

養老　だから都市に集まりやすいんです。とくに日本は狭いから。それでどうやって田舎へ行くかという話だけど、落ち着くところは地方のユニットをちゃんとつくることかな？　真ん中に都会的な機能を置いて、そのまわりに町を配置するような社会構造をつくるしかないんじゃない？　というのも、田舎の問題は医療なんです。へんぴな所へ行くと医者がいなくて心配という人が多い。だから1時間ぐらいでアクセスできる所に中心部をつくり、そこに大きな病院も置く。

内田　サイズの問題もありますね。

養老　そう。東京は人が多過ぎる。こんなに知り合いを増やすわけにいかないでしょ。どれくらいのサイズがいいのか。

内田　市の成立条件が人口5万人ですから、それくらいかな。

養老　いまの鎌倉市は17万人。旧市街だけだと5万人ぐらいかな。

内田　経験的に、それくらいの数が行政単位として使い勝手がよいということがあったんじゃないでしょうか。江戸時代300藩の頃は、小さな藩でも家老がいて、武芸指南役がいて、能楽師がいて、お茶の宗匠がいて……といろいろな人材がいたわけで。それだけ揃えるにはそれなりの人口が必要だった、と。

境界線のない場所がいちばんハッピー

内田　いま政府が推進している地方の「コンパクトシティ」構想は、地方都市の駅前に機能をぜんぶ集めるという考えです。周辺の里山はもう無人にしたい。道路も通さないし、上下水道も電気も通さない。行政コストを減らすために里山

都会人は音にもにおいにも
ナーバスですよね

を居住不能にする。TPPもそうですね。山間部ではもう農業なんかやらせない。

養老　田畑がほんとうに危機的ですね。飛行機で関東平野の上を飛ぶとわかります。ビニールハウスで覆われていますよ。最近は、地主が里山を売ってソーラーを置くでしょ。休耕田に砕石を入れちゃうから、もう畑に戻せませんよ。自然保護じゃないんです、ソーラーは。

内田　ソーラーは見苦しいですね。私はじつは風力発電もきらいなんです。

養老　現代人は平らな土地が空いているとムダだと思うみたいね。周りを囲って不動産屋の看板を立てるようになりました。僕らが子どもの頃は囲いなんてなくて、ぜんぶ空き地でしたから。

内田　ある時点からいきなり空き地を厳しく囲うようになりましたね。

養老　人間、ケチになったことは間違いない。たしかに所有権はあるけれど、もともと土地は天下の物だという意識があった。その空いた部分で子どもたちは遊んでいたのに、その余白が消えていく。

内田　余白、大事ですねえ。

養老　僕の住んでいる鎌倉は東京と比べたら田舎だけど、いちばん助かっているのは隣に家が建ってないこと。裏は山で隣は墓で前は道路だから地境の問題がない。住むにはこれがラクなんですよ。

内田　境界線というのはカインとアベルの昔からの文明史的な問題ですね（聖書『創世記』に出てくる兄弟。兄カインは農耕を、弟アベルは放牧を行う）。農耕民は「ここはオレの土地だ」と囲う。遊牧民には土地所有という概念も境界線という概念もない。誰でも自由に行き来できるものだと思っている。定住民と遊牧民の確執がいまも続いている。

養老　何年か前に、ケニアのトゥルカナ族という漁労民の住む湖に行きました。ちょうど干ばつで魚が捕れなかった時で、「5000人のトゥルカナ族がエチオピアに越境した」とケニアの新聞に書いてあった（笑）。

内田　国境線の方が後からできたんだから「越境」と言っちゃいかんです（笑）。いまもシリア内戦でトルコへ越境なんて言うけれど、あのへんはもとはオスマン帝国ですから、国境線なんてなかった。国民国家の発想を遊牧民に当てはめちゃだめですよ。

養老　だいたいでいいんですよ。

内田　イスラーム法学者の中田考先生に聞いたのですが、遊牧民にとって砂漠は海と同じなんだそうです。誰の所有物でもない。

養老　境界線がないのはハッピーですよ。都会に住んでいるとなかなかそういう感覚がわからない。あっちもこっちも仕切られて窮屈でしょうがない。刑務所みたいでしょ。入ったことないけど。

所変われば頭も変わる
脳は徹底的に適応する

内田　都会人はパーソナルスペースに入ってくるものに対してナーバスですよね。

養老　音にうるさい。

内田　においに関しても非寛容になりましたね。昔はもっと臭かったですよ。

養老　文明化するというのは、感覚を使わなくなることなんです。この部屋の明かりも蛍光灯で光が一定でしょ。空調が入っているから気温も一定。都市はなるべく環境を一定にして、感覚を使わなくてもいいようにつくられている。自然は感覚を徹底的に刺激します。外にいるのと空調の効いたビルの中にいるのとでは、体感に雲泥の差がありますね。都会で暮らす人と田舎で暮らす人、ぜんぜん違う人になるのは当然です。こんなに乖離していっていいのかなと思う。

内田　子どもだけでも「参勤交代」して田舎で暮らしたほうがよさそうです。

養老　おもしろいのは、脳って状況が変化すると徹底的にそれに合わせちゃうんです。若い人ほど合わせちゃう。そうした意味では脳は自主性を持っていなくて、まわりに適応すると考えられます。だから都会の環境は絶対、子どもにはよくない。感覚の鈍い、妙な人になっちゃう。

内田　都会から田舎に移住した人の話を聞くと、ほとんどは「暮らすの楽だ」って言いますね。日本人はもともと農耕民なんだから、里山にスムーズに適応できるDNAがあるんじゃないですか。

養老　そう、いくつになっても適応できますよ。世界のとんでもない僻地で暮らしている日本人もいるじゃない。脳の適応力ってすごいんですよ。（次号へ続く）

養老孟司

1937年、神奈川県生まれ。鎌倉市在住。解剖学者。東京大学医学部卒業後、解剖学教室に入る。後に医学部教授。趣味は昆虫採集で好きな虫はゾウムシ。箱根に建てた「養老昆虫館」の館長。著書に『唯脳論』（青土社、ちくま学芸文庫）、『バカの壁』（新潮社）、ほか多数。近著に『「身体」を忘れた日本人』（C.W.ニコル氏と対談。山と渓谷社）。

内田樹

1950年、東京都生まれ。神戸市在住。東京大学文学部仏文科卒業。専門のフランス現代思想をはじめ文化、社会、政治を網羅的に考察する〝インテリおじさん〟。合気道の道場「凱風館」の館長として指導のかたわら（合気道七段）、寺子屋ゼミを開く。淡路島の知り合いの農場に出資中。近著に『困難な成熟』（夜間飛行）、『「意地悪」 化する日本』（福島みずほ氏と対談。岩波書店）。

若者よ、
地方をめざせ!

第10回

ローカルを突きつめろ!

後編

「都会より田舎のほうがずっと刺激的」と養老先生。
「なんでも平均値で均一な世界がグローバル」と内田先生。
ふたりの知性が語る、これからの私たちの生きる道。
「ローカルに生きるということ」は成熟をめざして生きること。
若者よ、地方をめざせ。

構成・佐藤孝雄　写真・柳太郎

スペシャル対談

養老孟司 × 内田樹

この先は自分でやるしかないと決めたとき、大人になる

養老　ローカル、グローバルということでいうと、日本人の世界とのつきあい方って昔から難しくてね。僕は明治時代の夏目漱石の感覚がわかる気がするんですよ。漱石は文学をやるためにロンドンに留学したけれど、そこで何も心に触れるものがなくて神経衰弱になった。結局、帰国直前に自分の気持ちが決まった、「もう自分でやるしかない」と。それを「私の個人主義」と呼んだんだね。漱石はそこで大人になったんだ。文学論を書くんだったら西欧の真似じゃなくて、自分で考えて書くしかないと。当然といえばそうなんだけど、そこが日本人の成熟だと思う。

内田　日本人の成熟……。数学者の岡潔（おかきよし）もそうですね。

養老　日本人って大人になるとき、そうなるんです。ここから先は自分でやるしかないとわかる、そこが自分の居場所。そこが自分のローカル。だから人生、どこで暮らしてもあまり関係ないんです。要するに自分は何をしていくのか。それは何となく決まるんですよ。

内田　先生もそうやって解剖学の仕事に入られたんですか。

養老　僕の場合、ほかのこともやろうと思えばできたんです。でも当時（1962年）、大学が荒れていて医学部もめちゃくちゃでしょ。解剖って準備が大変なんです。準備って死体集めね。でも、だれかがやらないといけない。公平にやろうなんて議論してたら一日潰れちゃう。面倒くさい、オレがやる、となった。

内田　だれもやらない仕事をやった。

養老　やらなきゃいけないことをやる、それが大人になるってことですよね。社会的な意味で大人になることは、自分のローカルを見つけることと同じ。いま働いている場所、住んでいる場所で自分が何をすべきかは、ひとりでに決まるはず。あとは自分でやるしかない。ローカルな世界です。グローバル基準とか関係ない。

内田　ローカルを突きつめるというのは、自分を突きつめていくことですね。

養老　でも、それが東京にいると部品にしかなれないでしょ。大会社にいたらもっと部品になっちゃう。

内田　アメリカ型の雇用形態を取り入れた弊害も大きいですね。ジョブ・ディスクリプションといいますが、雇用契約書に記載されている以外の仕事はする義務も権利もない。伝統的な「だれのものでもない仕事は自分の仕事」という考え方は許されない。「これをしろ」は「それ以外はしてはいけない」と対になっているんです。これが現代人を働きにくくしていると思います。

いくらグローバルになっても身体という限界がある

内田　漱石の話ですけど、明治30年ごろの日本人の心細さは、私たちの想像を絶するものがあると思うんですよ。明治維新でそれまでの日本の伝統的な制度文物を投げ捨てたわけです。こんなものがあったせいで近代化できなかったんだという思いで、江戸期まで大切にされてきたものに対してシステマティックに嫌悪感を抱いた。その渦中にあって漱石は「ちょっと待て」と踏みとどまった。人々が弊履（へいり）の如くうち棄てたものの中に「棄ててはいけないもの」があったんじゃないか、と。ロンドンに行った漱石が見出したのは、江戸時代に半身を残している自分だった。それを切り捨てたら、もう自分が自分ではなくなってしまう。どうやって江戸に遺した半身と西洋化された明治の半身を縫合するか。それが漱石が引き受けた課題だったと思います。日本ローカルとどんどん入り込んでくるグローバルなものをどうつなぐか。そして、漱石は知識人の仕事は「架橋すること」だと肚（はら）をくくった。そして、アカデミックな文学研究を捨てて、コロキアルな文体で『猫』や『坊っちゃん』を書きはじめた。文字通り、自分の身体を「橋」にして世界と日本をつなごうとした。続く諸君はオレの背中を渡って行け、と。

養老　日本人はずっとその橋渡しに悩んで

いまいる場所で何をしていくのか、ひとりでに決まるはず

養老孟司

1937年、神奈川県生まれ。鎌倉市在住。解剖学者。東京大学医学部卒業後、解剖学教室に入る。後に医学部教授。趣味は昆虫採集で好きな虫はゾウムシ。箱根に建てた「養老昆虫館」の館長。著書に『唯脳論』（青土社、ちくま学芸文庫）、『バカの壁』（新潮社）、ほか多数。近著に『老人の壁』（南伸坊氏と対談。毎日新聞出版）。

きたんじゃないかな。まぁ、どんなにグローバルといっても、身体は1つしかないから世界中で暮らせるわけじゃないし、知り合いがつくれる範囲も限られているけどね。

内田　身体という限界がありますね。

養老　人には相応の大きさがあると思うんです。その相応というものが、現代では難しくなったとつくづく感じたのが、今年1月にあった軽井沢のスキーバスの事故。早稲田とか法政の学生が亡くなりました。親御さんはあの子たちをあそこまで育てるのにどれだけ手数をかけたか。それをあんな安売りのバスで……と思うと悔しくてね。分相応という言葉は嫌われていますが、いい意味もあるんです。分相応のお金の使い方をしてほしいと思いましたよ。

自分が「大切」であることがわからなくなっている

内田　「分相応」のふるまいがどういうものかがわからなくなったのは、若い人たちの自己評価が低いことと関係あるかもしれませんね。自分の潜在的な可能性への期待がずいぶん低い。

養老　そうですね。修行する人もめっきりいなくなったし。

内田　自分の能力を「商品」だと思っているから、客観的で精密な仕様書を添付しないといけないという義務感にせきたてられている。自分自身の潜在的な資質に対する敬意や好奇心が足りないと思います。自分の心身の資源は「商品」でも「所有物」でもない。だから、ていねいに扱って、花を咲かせなきゃいけない。

修行というのは自分の潜在可能性に対する無条件な信頼がなければ絶対にできない。修行して、自分を「作品」として仕上げてゆく。そういう意識が非常に希薄だと思います。理由は明らかで、子どものころからずっと査定され続けてきたからです。同学齢集団内部での自分のポジションはこのへんということを骨身にしみて教え込まれてきた。そのポジションにふさわしい夢を見て、ふさわしい野心を持ち、ふさわしい欲望を持つことを自分で自分に強いている。

それに、若者たちに対しては自己評価を切り下げろという社会的圧力がますます強まっています。雇用側からすれば、自己評価の低い労働者のほうが安くこき使えるわけですから当然なんです。だから、偉い人たちは若い人に向かって「うぬぼれるな。分際をわきまえろ」とがみがみ叱りつづけている。そのせいで若者たちは「正味の分相応」がわからなくなってしまった。

養老　外部評価がどうであれ、というのがほんとうのプライドなんだけどね。

内田　そうですよね。でも「プライドを失うな。誇りを持て」と、「諸君の中には、まだ開花していない可能性があると信じなさい」とだれも教えない。人間がコントロールできる部分なんて、潜在能力のうちのほんの一部分でしかないのに。

測れる能力は1%に過ぎない 意識は氷山の一角に過ぎない

養老　先日、本を読んで驚いたんだけど、脳の神経細胞は全体で3000億といわれていて、そのうち大脳皮質に200億、小脳に800億あるんですって。ぼくは昔、研究室で半分小脳の欠けた頭蓋の標本を見たことがあるんですが、その持ち主はふつうに生きられたそうです。生きられたどころか、日本舞踊のお師匠さんをされていた。

内田　その方は小脳が先天的に欠けていたんですか？

養老　そう。小脳は運動系を司るんだけど、半分なくても踊れるし、意識の働きにも関係ないということですよね。人の意識がいかに限られたものかわかるでしょ。要するに脳みそって、あればいいんです。

内田　（笑）バイパス通して、なんとかしちゃうんですよね。人間の潜在可能性はそれほど予測しがたく巨大だということですよね。身体能力で数値的に計測できるのはほんとうに1%ぐらいなんです。99%は測定不能。「どこでも寝られる」とか「なんでも食える」とか、生きる上で真に有用な能力はだれも査定しようとしない。そういうほんとうに必要な能力は点数化したり、他人と比べるものじゃないからです。でも、生きるためにほんとうに必要な能力をどう育てていくのかは、学校でも家庭でもまっ

だれもしない仕事だからオレがやる。そこがローカル

内田樹

1950年、東京都生まれ。神戸市在住。東京大学文学部仏文科卒業。専門のフランス現代思想をはじめ文化、社会、政治を網羅的に考察する〝インテリおじさん〟。合気道の道場「凱風館」の館長として指導のかたわら（合気道七段）、寺子屋ゼミを開く。淡路島の知り合いの農場に出資中。近著に『困難な成熟』（夜間飛行）、『悩める人、いらっしゃい 内田樹の生存戦略』（自由国民社）。

たく主題にならない。教育に競争を持ち込んだことの最大の弊害はそれですね。

養老　教育は内田さんみたいな心ある人がなんとかやってくれそうだから。

内田　身銭切って、私塾を始める人が、僕のまわりにはたくさんいますよ。そういう教育のオルタナティブがこれからは同時多発的に出てくると思います。

養老　必要ですね。ところで学校はなんでも教えすぎだよね。幼稚園から英語とか教えなくてもいいのに。

内田　そうですね。子どもたちはひとりひとり個性も違うし、進度も、めざしているものも違う。だから、僕の仕事は「この子はどうなるだろう」と思いながら、ただボーッと見ているだけなんですけど（笑）。

養老　背の伸び方だって、ひとりひとり違いますしね。胎児の成長過程もみな違うんですよ。お腹の中で膵臓ができて目ができて耳ができて、まぶたが閉じて、と順番があるんだけど、その進み方がかなりバラバラ。

内田　そうなんですか。小児科の先生から聞いたんですが、いまは子どもの成長にガイドラインがあって、生後何週間目で何ができるようになるか標準的なことが書いてある。離乳食を食べるとか、ストローで水を飲むとか。そのスケジュールどおりに成長していないと、母親が青くなって「うちの子は発育不全です」って小児科に駆け込んでくるそうです。

養老　なんでも平均値で見るからおかしくなるんです。平均したら個々が見えなくなるから意味ないのにね。お姑さんが平均寿命になったからそろそろ死ぬかって（笑）。

内田　学生だって、どの段階で爆発的に開花するか、何がそのトリガーになるかなんてわからない。突然化けるんです。計画なんかできないです。

養老　意識は氷山の一角だから。そこで都市の話に戻るけど、都市は意識がつくった世界だから氷山の一角。

内田　意識が外化したのが都会。

養老　計算されたものしかない。意識でつくり出したものだから、意識できるものばかりなんです。だから都会って刺激があるようでないわけです。自然にはワケのわからないものがいっぱいある。今日もうちの庭の木瓜（ぼけ）が一輪だけ咲いて、ヘンなヤツだなと思って見ていたんだけど、そういうヘンなのが大事。自分にどう影響するかわからないから。それが都会に来ると、例外的な事象として新聞記事になっちゃう。そうじゃないんだ、例外的なのがあたり前なんだって言うんだけど、なかなか通じない。

平均値で置き換えられない世界で生きる

内田　地方再生策を立てる上で、超えなければいけないハードルは医療と教育の2つだと思います。先日、周防大島に行ったとき、島の人が「衣食住の基本的な財は物々交換でなんとかまかなえるけれど、医療と教育だけは現金がないとダメだ」という話を聞きました。でも、医療と教育というのは「それがないと共同体が存立できない制度」ですから、市場経済に組み込まれなくても、人間が生きている限り、そこに存在しなければならないし、存在しているはずなんですよね。医療者も教育者も貨幣経済以前から存在したんですから、貨幣がないと出現しないものじゃない。おそらく人類史上最も早く出現した専門職だと思います。ですから、医療と教育には、それを自分の「ミッション」だと考えて身銭を切ってもその職務を全うするというメンタリティの人が必ずいる。僕はそう信じています。「医療や教育は市場で売り買いする財やサービスではなくて、人間が生きるためになくてはならないものだ」ということを確信している人たちが一定数いれば、貨幣なんかなくても、市場経済に組み込まれなくても、医療や教育を活用することはできると僕は思います。

養老　医療には昔からその問題があります。お金の問題と倫理の問題。たとえば、ぼくが東大病院にいたときの話だけど、人工呼吸器は7つしかない。そこに8人目の患者が来たらどうするか。だれかのを引っこ抜くか、8人目を断るしかない。現場は常に判断に迫られる。

内田　そういうときは、どういう基準で判断するんですか？

養老　基準はないです。その場その場で、これはダメそうだとか、ダメじゃないかもしれないとかね。待ったなしですから、とにかくその場その場で判断しないといけない。人生、その場その場ですよ。

内田　いい言葉ですねえ。

養老　ローカルってそういうことじゃないかなあ。グローバルはぜんぶ計算された世界ですから。予想の平均値で動いているんだから。

内田　言語も度量衡も通貨も法律もぜんぶ均一化していくのがグローバルですからね。

養老　だからアメリカってぜんぜんグローバルじゃないんです。相変わらずヤード、ポンド、マイルだもの（笑）。日本人はちょっと敏感過ぎるんですよ、グローバルに関して。

内田　明治維新以来のトラウマですね。

養老　自分が最先端を走っていることに気がついていない。

内田　「世界史の中の日本史」という視点が足りないですね。世界で起きている現象と、日本で現在起きている現象との間には必ず論理的なつながりがあるはずなんですけれど、そこを見る習慣がない。だからGとLとか、すぐ分けちゃう。

養老　GでもLでも、どこで暮らしていてもいい。自分の仕事をしていれば、そこがローカルです。

内田　自分の仕事を見つけることで、人は大人になる。成熟をめざすならローカルに生きたほうがいいですね。